

(独立行政法人教職員支援機構委嘱事業)

教員の資質向上のための研修プログラム開発支援事業報告書

プログラム名	いじめ問題対応力を高める教育相談コーディネーター養成プログラム
プログラムの特徴	<p>1. 教育相談・生徒指導に関する先進的知見を含めた研修内容 本プログラムは、いじめ問題へより効果的に対応するため、子どものアセスメントを通じた早期発見早期対応の取り組みに加え、いじめの発生を抑える人間性、いじめ仲裁スキル、学校生活でのストレスを軽減する環境調整など、チーム学校の中で包括的に教育相談・生徒指導をコーディネートすることが可能な教育相談コーディネーターの養成を目的としている。そのため海外視察や調査を通して得た先進的な知見を基盤として日本の実情に合わせて研修内容を組んでいる。</p> <p>2. 主体的な力量形成を意識した研修スタイル 教育相談コーディネーターとしての力量形成のためには座学で知識を学ぶだけでなく、それを実際の学級・学校に適用したり、実際にコーディネートするために必要な児童生徒理解、カウンセリング、コンサルテーション等に関するスキルを身につけたりする必要がある。そのため研修では講義に加え演習やディスカッション、学級・学校の現状分析の実習、リフレクションやスーパーヴァイズなどを組み込み各回の研修を構成している。</p>

平成31年3月

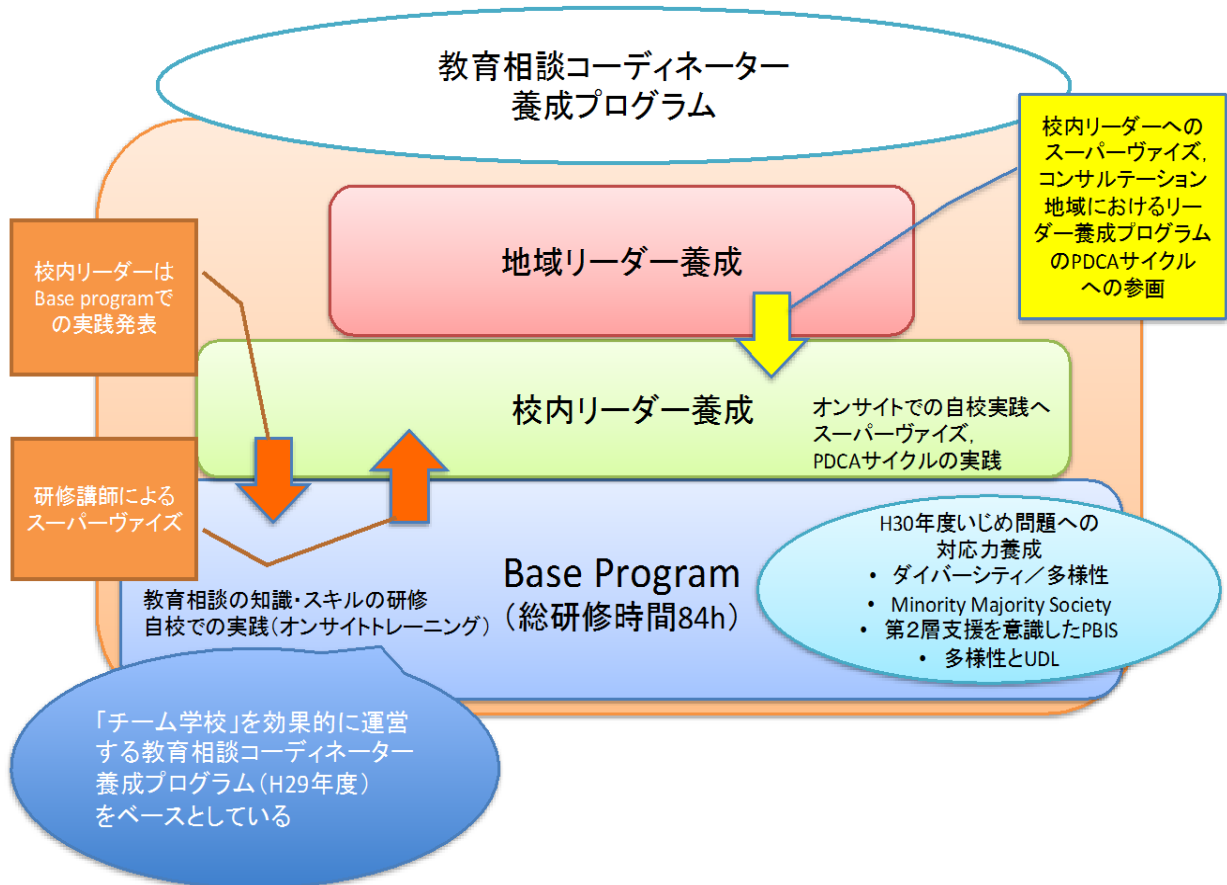
機関名：公益社団法人学校教育開発研究所

連絡先：広島市中区鞆町3番1号

研究代表者：栗原慎二

## プログラムの全体概要

本年度のプログラムの開発成果として、ダイバーシティ／多様性理解のためのマインドセットや、そのマインドセットをベースとしたいじめ問題への対応力養成プログラムを開発した。



## 1 開発の目的・方法・組織

### ① 開発の目的

いじめに関しては H29 年度においても、いじめと関連した重大案件が発生している。こうした問題に対して充実した三次的支援体制をつくることはもちろん重要であるが、三次的支援は問題発生後の対応であり、いじめの問題の発生を抑えるアプローチではない。

こうしたことを踏まえれば、いじめアンケート等による早期発見早期対応の取組だけではなく、いじめをしない人間性、いじめを仲裁するスキル、いじめに繋がるようなストレスを軽減する教室環境作りや授業作りなどの一次的支援も極めて重要であるといえるし、こうした点について、十分な知見をもち、同僚教師に対してコンサルテーションやスーパーヴィジョンができる教育相談コーディネーターの養成が急務である。

そこで本プログラムでは、いじめを予防し、いじめ問題への対応力を高めるために教育相談コーディネーターに必要な知識やスキルを整理し、チーム学校の中で連携をはかりながら効果的に一次的支援から三次的支援というマルチレベルの支援を展開することのできる教育相談コーディネーターを養成する研修プログラムを開発することを目的とした。

### ② 開発の方法

海外における先進的な知見を生かすために、アメリカにおいてスクール・サイコロジストとして活動し、日本で PBIS や UDL の実践を広めているバーンズ亀山静子先生を招聘して研修会を開催し、プログラム開発メンバーでの理解を深めた。また、次の2つの実践の実例や先進的知見を得るために、ハワイ大学 UDL センターの高橋桐子准教授のコーディネートで、ハワイでの視察を行った。

#### 1) P B I S (Positive Behavior Intervention and Support) とは

アメリカで生まれた、支持的な関わりによって価値的な行動を身に付けさせることを目的とした取組である。現在アメリカでは 20%以上の学校で取り込まれるようになってきている。注目すべき点として特別支援をベースとしているため、ASDやADHDといった発達障害の児童生徒にとっても有効性が高いアプローチであり、いじめの加害と被害の両方に効果を持つと考えられること、また、規範意識の醸成にもつながる取組であり、道徳・生徒指導・教育相談をつなぐ内容を含んでいる点である。すでに試行的に石巻市や総社市で取り入れ、かなりの成果を上げている。

#### 2) U D L (Universal Design of Learning) とは

UDLは、教育者が学習者一人ひとりのさまざまなニーズに対応できるように、学習の目標、方法、教材・教具、評価の方法等を柔軟にデザインすることで、全ての学習者に効果的な教育を提供しようとするものである。このような学習環境を整えることは、学習者である児童生徒にとって、毎日生活する教室環境と授業環境が大きく変わることを意味する。このような個を重視する姿勢は教育相談と深いかわりがあるし、そのことによってストレスのない学級づくりを進めること、ひいてはいじめ等のない学級づくりに寄与する。

### ③ 開発組織

プログラムの開発と研修プログラムの実施には以下のメンバーが携わった。

No	所属・職名	氏名	担当・役割	備考
1	学校教育開発研究所 代表理事	栗原 慎二	プログラム開発の主担当者、生徒指導・教育相談・学校カウンセリングの観点から知見収集・整理、関連団体との連携推進実際のプログラム研修講師を担当。	広島大学大学院 教授・日本学校教育相談学会会長
2	同 理事	金山 健一	生徒指導・教育相談・学校カウ	神戸親和女子

3	同 理事	エリクソン ユキコ	セリングの観点から知見収集・整理, 関連団体との連携推進, 研修講師を担当。 教育相談・臨床心理学・特別支援教育の観点から知見収集・整理, 海外機関との連携, 通訳を担当。	大学教授 臨床心理士, 学校心理士 広島大学客員 准教授, 臨床 心理士, SC
4	同 研究員	山崎 茜	生徒指導・教育相談・学校心理学の観点から知見収集・整理, プログラムの効果の調査及び分析・報告, 研修講師を担当。	広島大学客員 准教授, 学校 心理士, SC
5	同 客員研究員	石井 眞治	生徒指導・教育相談・教育行政の観点から知見収集・整理, 関連団体との連携推進を担当。	比治山大学 学長・元広島 市教育委員長
6	同 客員研究員	高橋 あつ子	生徒指導・教育相談・特別支援教育知見収集・整理, 研修講師を担当する	早稲田大学 教授
7	同 客員研究員	小玉 有子	教育相談・臨床心理学・特別支援教育および養護教諭としての観点から知見収集・整理, 研修講師を担当する	弘前医療福祉 大学教授
8	同 客員研究員	神山 貴弥	生徒指導・教育心理学・社会心理学の観点から知見収集・整理, 研修講師を担当する	同志社大学教 授
9	同 客員研究員	米沢 崇	学校経営学・教師教育の観点から知見収集・整理, 研修プログラムの結果分析・報告, 研修講師を担当。	広島大学准教 授
10	同 客員研究員	山田 洋平	生徒指導・教育相談・発達心理学及びSELの観点から知見収集・整理, 研修プログラムの結果分析・報告, 研修講師を担当。	島根県立大学 研究員

## 2 開発の実際とその成果

### ①「H30 年度総社市だれもが行きたくなる学校づくり研修会」

「H30 年度石巻市学習指導の改善を図る研修会」

#### ○ 研修の背景やねらい

当法人と連携して 8 年間にわたり「だれもが行きたくなる学校づくり研修会」として教員研修に取り組んでいる総社市では, いじめ認知件数は全国の 22%と低い数値となっている。また, 同じく 3 年間にわたり当法人の提供する研修を実施してきた石巻市では, 教育実践のモデル校において, いじめの未然防止への取り組みと早期発見・対応, いじめと疑われるものに対して丁寧に対応した結果, 平成 28 年度末のいじめ解消率は小中ともに 80%を超えている。

一方で, 未だいじめ問題が生じたり, 不登校の改善が十分には至っていなかったりするという現状もあり, 児童生徒の状態を的確に把握し, 早期発見・早期対応を行うことや, 児童生徒

の多様性を理解し、学校を安全で安心な場としてコーディネートする、教育相談を中心とした予防的・開発的な生徒指導のアプローチが必要とされており、そのためのコーディネーターを要請することが求められている。そのため、本プログラムでは以下のようなねらいを設定した。

- 1) 正確な児童生徒理解に関する知識・スキルを有し、校内において児童生徒理解について共通理解をはかることのできる人材の育成
- 2) PBIS, UDL などについて理解し、学校を安全で安心な場として環境調整できる人材の育成
- 3) 支援ニーズの高い児童生徒や保護者と信頼関係を結び、校内外の連携を適切にはかりながら教育相談活動を展開できる人材の育成

○対象、人数、期間、会場、日程講師

【対象】教育相談コーディネーターを目指すもの

【人数】総社市：約 80 名、石巻市：約 60 名

【日程・会場】各依頼元の指定する日程および会場

【講師】本事業代表者の栗原を始め、開発組織一覧表に記載されている者

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

上述したねらいを達成するためには、すでに昨年度作成している教育相談コーディネーター養成プログラムの内容をさらにブラッシュアップし、近年の子どもの問題の背景に関連が深いと考えられる愛着の発達についての理論的背景、問題行動のリスクが高い子どもを対象としたPBIS の実際の理解、ダイバーシティ、Minority-Majority Society といった多様性の理解をベースにした教員のマインドセットに働きかける研修内容を盛り込み、それらを受講者の教育実践とすり合わせ、OJT 的に展開する必要があると考えた。

○ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

※詳細な研修内容・時数は別紙を参照されたい

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
アセスを用いた児童生徒理解（困難事例含む）	12h	正確な児童生徒理解ができる人材の育成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 内容 学校適応感尺度（アセス）の構造の理解と実際の児童生徒のデータを用いた子ども理解の実習・スーパーヴァイズ</li> <li>・ 実施形態 一斉講義とグループワーク</li> <li>・ 使用教材 講師が作成したテキストおよび受講者が自校でアセスを実施して得た子どもの回答データ</li> <li>・ 進め方の留意事項 アセスのデータ、家庭環境や学習成績など重要な個人情報扱うため、守秘義務については研修前に説明しておくこと</li> </ul>
PBIS	6h	学校を安全で安心な場として環境調整できる人材の育成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 内容 PBIS の理論的背景の理解と国内での先行実践の紹介、自校での実践の計画、実行、成果発表</li> <li>・ 実施形態 一斉講義とグループワーク</li> </ul>

			<ul style="list-style-type: none"> <li>・使用教材 講師が作成したテキスト，模造紙，付箋紙</li> </ul>
SEL	6h	学校を安全で安心な場として環境調整できる人材の育成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容 SEL の理論的背景の理解と自校での実践の計画，実行，成果発表</li> <li>・実施形態 一斉講義とグループワーク（実践指定校ではオンサイト研修を実施）</li> <li>・使用教材 講師が作成したテキスト，実践者の作成した教材など</li> </ul>
協同学習	4. 5h	学校を安全で安心な場として環境調整できる人材の育成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容 協同学習の理論的背景の理解と自校での実践の計画，実行，成果発表</li> <li>・実施形態 一斉講義とグループワーク（実践指定校ではオンサイト研修を実施）</li> <li>・使用教材 講師が作成したテキスト，実践者の作成した教材など</li> </ul>
ピア・サポート	6h	学校を安全で安心な場として環境調整できる人材の育成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容 ピア・サポートの理論的背景の理解と自校での実践の計画，実行，成果発表</li> <li>・実施形態 一斉講義とグループワーク（実践指定校ではオンサイト研修を実施）</li> <li>・使用教材 講師が作成したテキスト，実践者の作成した教材など</li> </ul>
UDL	6h	学校を安全で安心な場として環境調整できる人材の育成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容 UDL の理論的背景の理解と自校での実践の計画，実行</li> <li>・実施形態 一斉講義とグループワーク</li> <li>・使用教材 講師が作成したテキスト</li> </ul>
カウンセリングスキル （ブリーフセラピー）	9h	支援ニーズの高い児童生徒や保護者と信頼関係を結び，教育相談活動を展開できる人材の	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容 教育相談・カウンセリングの理論の理解と演習</li> <li>・実施形態 一斉講義とグループやペアでのロールプレイ，演習</li> <li>・使用教材 講師が作成したテキスト</li> </ul>

		育成	
教育相談コー ディネーター に必要なコー ディネーショ ン・コンサル テーションカ	15h	校内におい て共通の児 童生徒理解 をはかり、 校外外の連 携を適切に はかりなが ら教育相談 活動を展開 できる人材 の育成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 内容 チーム支援のためのコーディネーション・コンサルテーションの理論の理解と演習</li> <li>・ 実施形態 一斉講義とグループやペアでのロールプレイ、実際の事例をもとにした支援の演習</li> <li>・ 使用教材 講師が作成したテキスト</li> </ul>

## ○研修の評価方法、評価結果

### ・インタビュー調査

今年度の研修受講者を対象に、本プログラムを受講してみた自身の感想や日常の実践などについてグループインタビュー形式で調査を行なった。その結果、全員が肯定的に評価していた。特に 代表的な発言を以下に示す。

#### 【研修を1年間受けた感想】

「1年目に研修を受けた時は、2学期ぐらいから、ためになること言ってるな、という感覚を持ってました。でも、わからないで終わりました。いただいた原稿を棒読み状態になる感じで。でも2年目は、4月の段階から、こうくる、こうくるっていうのがわかるので。伝達研修でも自分の言葉で言えるようになりました。」

「昨年度まで市教委にいた教員が現在自校の教頭で。これまでにあった自校の活動を、うまくこのプログラムにはめてくださって。だから自校の教員の関心は高いと思います。でも、研修で聞いてきたことを私が伝達で話してもやっぱり伝えきれない。講師の先生の進め方でないと伝わらないのかなと。エッセンスはわかるのですが。本当にわかりたければ全部に参加する必要があるなと思います。」

「教育心理学には興味あったので、研修内容には興味をもって参加できました。かなり深いところまで話されるんだなとおもいました。研修講師は複数いらっしゃいますが、同じ理論だけど語り口が違うことで新しい発見がありました。演習なんかも、普段あまり話さない中学校の先生とかと実態を話せるので、PBISも、小学校はこうだけど、中学校どうですかって、中学校では部活とからんでいると中学校の事情を聞くことができよかったなと思います。」

#### 【プログラムを実際に回す上で難しいこと】

「講師の先生方の熱量がすごい。その熱量を伝達でうまく伝えられていない気がする。いい意味で、講師の先生の熱量を知ってほしい。自分の伝達講習でも、講師の先生だったらもっとうまく言えるんですけど、って終わったりします。なんでそんなことやらなきゃいけないの？っていう空気感が伝わってきた時に、こうだよ、わかって、と言いたい感じがある。」

「1年間受けてみて、新しいものをやれてことではないんだということがわかりました。掲示物にしても、今あるもので必要なものはどれかっていう優先順位をのこして、あとは後ろに春とか別の形でやるとか。今までやってきたものを違う手法で進めなきゃいけない時に、その共通理解をはかるのがむずかしいところはあります。ただ、実践をすすめていくとピア・サポートにしてもSELにしても、これまで各担任が個別に進めていたものを、それいいよねってみんなで持ち寄ってできるところ、そこはすごくよかったなと思っています。今までやっていたことを、職員

全体のツールとして共有できたところがあって、そういうところで今までやらなかった分の不慣れな部分とよかった部分がありました。」

・ 自由記述

研修で学んだ内容について、いじめ予防や平和なクラス作りに活かすことができたと思う具体例を記述を求めた。以下に代表的な記述を示す。なお、研究倫理上個人名や所属などは伏せる。

「PBIS から、望ましい価値行動の実践は、いじめ、不登校、温かなクラス作りをより意識すれば効果は大。アセス（注：学校適応感尺度の名前）も、定期的に必要だと思われるときに実施すること、そして見立てていくこと。学年会等で何となく最近難しいよねと思うだけと、その裏付けとしてアセスを見ることは、正しく見立てる率が格段に上がると思います。」

「本項では2年前に大きないじめ事案があり、特にいじめ対策に力を入れています。また、平和なクラスづくりだけでなく、「いじめ撲滅委員会の活動や PTA の相談窓口など多角的にいじめ対策を行なっています。この研修で学んだアセスや PBIS、ピア・サポートがそれらの活動になじんでいるように感じています。」

○研修実施上の課題

本プログラムの実践の感想から、理論を座学で学び、自校化して実践をする上で、研修講師の理解度に至っていないことに対する自戒が述べられた。本プログラムではオンサイトの研修としてモデル校での実践や、その実践発表を通じて理論と実践の往還を目指しているが、調査対象者は今年度初めて本プログラムを受講した方が多く、教育相談コーディネーターとして校内で包括的に教育相談・生徒指導活動を展開する知識の理解やスキルの醸成が十分に至っていなかったことが課題である。

3 連携による研修についての考察

(連携を推進・維持するための要点、連携により得られる利点、今後の課題等)

該当事項なし

4 その他

[キーワード] いじめ予防, チーム学校, 教育相談コーディネーター

[人数規模]

A. 10名未満    B. 11～20名    C. 21～50名     D. 51名以上

[研修日数(回数)]

A. 1日以内  
(1回)    B. 2～3日  
(2～3回)     C. 4～10日  
(4～10回)    D. 11日以上  
(11回以上)



【担当者連絡先】

●実施者 ※申請する大学名又は教育委員会名を記載すること

実施者名	公益社団法人学校教育開発研究所	
所在地	〒730-0016 広島市中区幟町3番1号	
事務担当者	所属・職名	事務局長
	氏名（ふりがな）	三原正司
	事務連絡等送付先	〒730-0016 広島市中区幟町3番1号
	TEL/FAX	082-211-1030
	E-mail	admin@aises.info

---